様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年５月３０日現在

研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2007 ～ 2009
課題番号：19530604
研究課題名（和文）想起抑制における意図ー行為ー表象の循環的機序に関する実証的研究
研究課題名（英文）An empirical study on circulative mechanisms of intention, action, and representation in memory suppression

研究代表者
野村　幸正（NOMURA YUKIMASA）
関西大学・文学部・教授
研究者番号：30113137

研究成果の概要（和文）：本研究では,「行為の本質」をインド心理学の知見に基づいて理論的に検討を進めると同時に，研究分担者の協力を得ながら，１）情報レイアウト環境に関する２つの実験，２）未来の行為を支える想起に関する２つの実験，さらには３）想起抑制に関する３つの実験をそれぞれ実施した。そして，得られた理論的，実証的知見に依拠しながら，意図の有無を超えた行為の理論を構築するために，意図ー行為ー表象の循環的機序に関する一つの考えを明らかにしたものである。

研究成果の概要（英文）：This study theoretically explored the essence of action on the basis of Indian psychology. In addition, we conducted three types of experimental explorations composed of two experiments on environmental layout of information, two experiments on memories for actions to be performed in the future, and three experiments on memory suppression. Based on theoretical and empirical findings of this study, we proposed an idea about circulative mechanisms of intention, action, and representation in order to construct a theory of action that is not limited to the distinction between intended and unintended action.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2008 年度	800,000	240,000	1,040,000
2009 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総　計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：心理学・教育心理学
キーワード：想起抑制，意図，行為，表象，教育系心理学

１．研究開始当初の背景

現在の心理学の理論は，人間の行動を外部から観察し，行為生成の過程をアドホックに認識するための理論を構築するという作業を繰り返している。しかし，それらは全体視野・外部観測の視点からのものであるため，あくまでも局所視野・内部観測に基づいて

日々の行為を生成している個々の人間の日常的な生の活動を説明できるものとはなっていない。現在の心理学が直面している閉塞感・不毛性も，この点に起因しているものである。

本研究は，このような閉塞した現状にブレークスルーをもたらすべく，局所視野・内部観測に基づく行為の生成（意図の具現化）と，それを支援あるいは制約する表象（経験知）との相互関係を明らかにしていく。特に，行為の生成過程において最も重要な役割を担っていると考えられる，行為の意図，行為の表象，行為生成そのもの，という３者の関係を内部観測的な視点から考察し，その考察に基づき実験・調査を行う。

意図，表象，行為の関係は熟達研究，行為の理論研究，自伝的記憶研究，想起抑制研究，極めて独自な意図論の展開，さらにはアフォーダンス研究においてもっとも関心あるテーマである。また，認知心理学，生態心理学だけでなく，経験知からフレーム問題の解決を目指す人工知能研究，また侵入思考の抑制を扱う臨床心理学，さらには研究代表者が進めてきた自問自答研究からキャリア教育へと深く結びつく研究分野であり，本研究の進展は，それらの研究分野に大きな波及効果をもたらすと予測される。

２．研究の目的

2.1　理論的研究

まず，理論的研究として，意図を具現する行為と意図なき行為とをどのように整合し，またその過程を意図－行為－表象の循環からどのように説明するかが求められる。

ここでは，その過程を説明する理論を構築するにあたって，無意図的想起とその抑制を現在の認知心理学，生態心理の知見を，また思索的なインド心理学（哲学）の知見をそれぞれ参照する。そして、それらの知見と最先端の実証的な心理学的知見を踏まえながら，新たな理論を考察し，意図，行為，表象の循環的な関係を解明していく。

この研究では，インドのプーナ大学関連教育機関「知の覚醒」研究所の名誉教授アショック・ニルファールケ，シュリカント・バフーカル，大阪大学非常勤講師小磯千尋を研究協力者とする。

2.2　実証的研究

もう一方の実証的研究は，金敷大之（畿央大学・健康科学部・准教授）を研究分担者として「情報レイアウト環境研究」，森田泰介（東京理科大学・理学部・専任講師）を研究分担者として「未来の行為を支える記憶研究」，内城祐希を研究協力者として「想起抑制研究」を同時に進める。

2.2.1　情報レイアウト環境の研究

局所視野・内部観測の事態において，意図－行為－表象の循環を安定した平衡状態として回すための，行為者の循環において捉えられた環境要因（情報レイアウト環境）を探ることが目的である。

研究は以下の３つの観点に基づいて行う。

(1) 局所視野の事態の中で，行為者が構成した理想あるいは目標としての全体視野的環境を探り，そのメンタルモデルあるいは素朴理論の内容を明らかにする。

(2) 局所視野の事態においては，一見虚構やフィクションと見なされがちな情報も，行為者にとっては循環を回す前提となりうる心的現実であるため，自伝的記憶における印象に残っているフィクションを取り上げ，その想起内容から構成された心的現実を探る手がかりとする。

(3) 実際に情報レイアウト環境が，循環に対してどの程度の影響を持つか，さらに行為

者本人にとっての環境に対する気づきと行為との関係を，直接プライミングという実験パラダイムで明らかにする。

2.2.2　未来の行為を支える記憶研究

状況に即応した行為に関する情報がタイミングよく想起され，必要な行為が遂行されることを保証するための認知過程，なかでも無意図的な記憶表象の活性化をめぐる諸事象について実験的に検討することを目的とする。具体的には，未来の行為の記憶表象が活性化される時に想起意図が存在するか否かによって想起の頻度が異なるのか，記憶表象の活性化のなされ方に個人差要因の効果は見られるのか，記憶表象の無意図的な活性化を支える認知過程の性質とはどのようなものか，の３点を明らかにする。

2.2.3　想起抑制研究

想起抑制の機序を解明するために，抑制対象（想起そのもの，想起事象）と抑制によって想起された対象に及ぼす要因を明らかにし，得られた知見から研究パラダイムを確立する。

次に，抑制の機序と抑制によって想起された対象の相互の関係からリバウンド効果を説明するモデルを構築し，そこでの想起意図と抑制行為の関係を明らかにする。

３．研究の方法

本研究課題の遂行は，理論的研究と実験的研究からなる。まず，理論的研究に関しては目的で既に言及した通りであり，研究代表者野村幸正が単独で遂行する。他方，実験的研究は，情報レイアウト環境研究，未来の行為を支える記憶研究，想起抑制研究を研究協力者の支援を得ながら，同時に進行させる。

3.1　平成１９年度

3.1.1　理論的研究

意図なき行為における表象と行為の関係を明らかにするために，「歩く瞑想」の内実を理論的に検討し，加えてタイの寺院でその瞑想を実践し，意図が低減するに伴って表象自体も減衰することを体験したのである。

3.1.2　情報レイアウト環境の研究

理想の部屋および対人関係を投影法によって明らかにした。研究参加者にルームシェアにおける間取りをデザインして描かせ，これを理想の情報レイアウト環境と見なす。投影された環境の複雑さを，身体の移動可能性，および可視性の観点から解析を行うことで，理想の環境内での行為者の理想の身体，および行為者の理想の認知を探った。（研究目的2.2.1.(1)に相当する。）

3.1.3　未来の行為を支える記憶研究

想起を意図的に求める条件とそのような想起を求めない条件とを設定することにより，記憶表象が活性化される際の想起意図の有無が，未来の行為に関する記憶の想起頻度に影響を及ぼすのかを検討した。その結果，意図の有無によって想起の頻度に影響が見られ，意図的に想起を求めた場合には，未来の行為に関する記憶の想起頻度が高まることが示された。

3.1.4　想起抑制研究

実験１(a)では抑制行為とリバウンド効果を検討するために，抑制対象か，抑制によって想起された対象かを区別し，それらの違いがもたらす効果を，また実験１(b)では抑制の意識度がリバウンド効果をもたらす過程を明らかにしたものである。そのため抑制教示の有無，抑制対象の有意味度，教示による意識度を操作し，得られた知見から研究を進めていくパラダイムを精緻化し，次年度に繋いだのである。

3.2　平成２０年度

3.2.1　理論的研究

瞑想事態における意図，表象，行為の関係をチベット仏教の曼荼羅に見出すために，レーの郊外で資料を収集し，プーナ大学のシュリカント・バフーカル博士からその解釈を受けたのである。

3.2.2　情報レイアウト環境の研究

自伝的記憶の方法論に基づいて，子どものころの，印象に残る絵本のストーリー，絵本を取り巻く対人関係，絵本を読んでいた環境などを，研究参加者に自由記述してもらう調査を行った。想起されたフィクションが，現在にどのように生かされているかを明らかにした。（山本晃輔との共同研究，研究目的2.2.1.(2)に相当する。）

3.2.3　未来の行為を支える記憶研究

行為に関する記憶表象の無意図的な活性化の頻度と個人差要因との関係，特に，時間的展望のあり方との関係について検討した。その結果，自己の過去・現在・未来のうち，現在を重視している者は，未来において行うべき行為について熟考する機会が少ないために，未来の行為に関する無意図的な想起の頻度が低くなることが示唆された。

3.2.4　想起抑制研究

実験２(a)は抑制の意図が行為としてあるのか，それとも表象か，を明らかにするために挿入課題の困難度を操作し，実験２b)では抑制が行為者に何をもたらすのか，その効果を行為者の採用した方略の違いからみていくために，回想的記憶と展望的記憶の双方における抑制の効果を比較したのである。

3.3.　平成２１年度

3.3.1　理論的検討

歩く瞑想，曼荼羅からインド心理学の核であるカルマに行き着き，カルマの実践である清掃行為の内実をインドで調査したのである。

3.3.2　情報レイアウト環境の研究

同時呈示された情報についての直接プライミング効果を検討した。文字配列および文字表記が，学習時とテスト時とで一致するかしないかの要因が，テスト時の促進にどの程度影響するかを測定することで，循環に対する影響を明らかにした。（研究目的 2.2.1.(3)に相当する。）

3.3.3　未来の行為を支える記憶研究

記憶表象の無意図的な活性化を支える認知過程の性質とはどのようなものかを明らかにするため，方向づけ課題の遂行に要する処理の種類を操作することにより，利用可能な処理資源の量を変化させたところ，利用可能な処理資源の量が少ない条件においては未来の行為に関する想起の頻度が低下することが示された。

3.3.4　想起抑制研究

実験３(a)では，意図が行為かあるいは表象かの違いが，想起の促進あるいはまた抑制にどのような違いをもたらすのか，また実験３(b)では抑制経験が何故に次の無意図的想起をもたらすのか，等を明らかにしたものである。そのため，前者では意図の違いがもたらすリバウンド効果を，後者では抑制の程度と後のリバウンド効果の関係を検討したものである。

４．研究成果

4.1　理論的研究

まず，研究課題の理論的研究を核としながら，併せて実証的研究を行い，次年度以降の研究の枠組みを明らかにした。それらは次の5 点からなる。１）従来の行為の概念を洗い直して，行為が現代認識，目的，手段を伴うものであり，さらには行為が世界観と自己観から切り離せないものであることを明らかにした。それが宗教的行為であることから，

たとえ心理学的に行為の研究を進めるのであっても，宗教的行為を排除しては行為研究が成り立たないとの認識に至ったのである。２）そこで宗教的行為に着目し，上座部仏教における宗教的行為，なかでも歩く瞑想を求めてタイに出張し，ワットでそれを体験し，また宗教行為とその実践の関係に関する文献を収集し，検討を加えたのである。歩く瞑想はそれ自体が目的であり，行為の範囲を拡大するものである。３）そして宗教的行為を含む行為一般の深層にある心的機序を純粋経験，覚自証から検討し，行為研究の理論的枠組みおよび方法を明らかにした。そのためインドで調査と資料収集を実施している。４）熟達者の行為を観察し，熟達行為の心理的機序に関する考察を進めた。５）外部の講師を招聘し，「身体としての精神」，「カルマと行為」，「リゾーム」についての研究会を実施した。

4.2　実証的研究

4.2.1　情報レイアウト環境研究

研究目的に対応して，以下の結果が明らかとなった。

(1) 未成年の大学生を参加者としたためか，理想の環境は，(a) 身体の移動可能性の高い単純な構造，および相手に１ステップの行為で接触できる距離感になりがちであった。(b) 遮蔽物のあまりない，可視性の高い構造になりがちであった。複雑な構造および可視性の低い構造をデザインした者であっても，投影された空間の自己の占める場については，未分化な構造として投影されがちであった。したがって，できるだけ未分化の情報レイアウト環境が，理想の環境として投影されているようである。

(2) 印象に残る絵本のストーリー自体は，ほとんど再生されず，むしろ絵本を取り巻く対人関係や，絵本を読んでいた環境が詳細に想起されがちであった。絵本については，文字情報よりも，挿絵として描かれているキャラクターの名前および属性の情報程度しか，想起できないようである。物語よりも，むしろ非言語情報の記憶が優位なようである。

(3) おおむね，学習時とテスト時との情報レイアウト環境が一致している場合に，プライミング効果が大きくなった。ただし，条件によっては一致が妨害効果をもたらす場合も見出されたため，今後の詳細な検討を要する。

4.2.2　未来の行為を支える記憶研究

未来の行為に関する記憶が，意図を介在せずに想起される現象を支える認知過程について，次のことが明らかになった。１）想起意図を介在するか否かによって，想起の頻度が異なるという結果が見られたことから，想起意図が存在する場合の想起の認知過程と想起意図が存在しない場合の想起の認知過程とは，全く同様のものであるとは考えにくいことが示唆された。２）時間的展望のあり方によって想起の頻度が異なることが示されたことから，自己の未来について頻繁に思考することがあるか否かが行為の無意図的な想起に影響を及ぼしている可能性が考えられた。３）現在遂行中の認知活動がどの程度処理資源を必要とするものであるかによって，未来の行為に関する記憶の想起頻度が異なることが示されたことから，未来の行為に関する記憶の想起には，処理資源を必要とする制御的な過程が関与していることが示唆された。

4.2.3　想起抑制研究

抑制の逆説的効果の生起に関する知見から，意図的に忘却することの可能性を論じ，新たなモデルを構築するに必要な知見を得た。

4.3　総合

得られた理論的，実証的知見に依拠しながら，意図の有無を超えた行為の理論を構築するために，意図－行為－表象の循環的機序に関する一つの考えを明らかにし，その成果を「想起抑制における意図－行為－表象の循環的機序に関する実証的研究」として報告書を作成している。

５．主な発表論文等

（研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計９件）

① 山本晃輔，野村幸正，におい手がかりの命名，感情喚起度，および快－不快度が自伝的記憶の想起に及ぼす影響，認知心理学研究，査読有，７巻，２号，2010，127-135
② 野村幸正，「気流れる身体」から認知科学への提言，人体科学，査読有，１８巻，１号，2009，69-77
③ 金敷大之，山本晃輔，絵本の思い出：大学生における物語の自伝的記憶についてのプロトコル研究，畿央大学紀要，査読無，１０号，2009，11-20
④ 金敷大之，行為事象記憶の自由再生と回想経験の検討（２），畿央大学紀要，査読無，９号，2009，43-47
⑤ 野村幸正，組織に埋め込まれた行為，関西大学文学論集，査読無，５８巻，2008，1-24
⑥ 森田泰介，展望的記憶と無意図的想起及び活動－状態指向性との関連性，岡山学院大学・岡山短期大学紀要，査読無，３１巻，2008，41-46
⑦ 金敷大之，行為事象記憶の自由再生と回想経験の検討，畿央大学紀要，査読無，８号，2008，15-20
⑧ 森田泰介，キャリアに関する不安と予定の無意図的想起の関連性，岡山学院大学・岡山短期大学紀要，査読無，３０巻，2007，19-24
⑨ 野村幸正，分析を超えた行為の生成，国際高等研究所報告書，査読有，2007，101-120

〔学会発表〕（計９件）

① 金敷大之，類似度評定に及ぼす前面情報および包囲情報の効果の違いについて（２），関西心理学会第 121 回大会，2009 年 11 月 15 日，大阪人間科学大学
② 金敷大之，理想の部屋に関する研究（２）―投影された空間の可視性とBig Five尺度との関連，日本心理学会第 73 回大会，2009 年 8 月 26 日，立命館大学
③ 森田泰介，無意図的想起の生起頻度に及ぼす覚醒水準の効果，日本心理学会第 73 回大会，2009 年 8 月 28 日，立命館大学
④ 野村幸正，「気流れる身体」から認知科学への提言，第 18 回人体科学会シンポジウム，2008 年 11 月 23 日，関西大学
⑤ 金敷大之，類似度評定に及ぼす前面情報および包囲情報の効果の違いについて，関西心理学会第 120 回大会，2008 年 11 月 9 日，奈良女子大学
⑥ 森田泰介，金敷大之，展望的記憶・回想的記憶の無意図的想起と時間的展望との関連性，日本心理学会第 72 回大会，2008 年 9 月 19 日，北海道大学
⑦ 森田泰介，予定記憶の想起順序と予定間の類似性との関連性，日本認知心理学会第 6 回大会，2008 年 5 月 31 日，千葉大学
⑧ 森田泰介，山本晃輔，野村幸正，マインドワンダリングに及ぼす想起意図の影響に関する実験的検討，関西心理学会第 119 回大会，2007 年 11 月 18 日，関西大学
⑨ 金敷大之，実在についての自問の頻度について，日本心理学会第 71 回大会，2007 年 9 月 19 日，東洋大学

〔図書〕（計２件）

① 野村幸正，関西大学出版部，熟達心理学の構想，2009，299
② 野村幸正，平成 19 年度～21 年度科学研究費補助金（基盤研究（C）研究成果報告書，想起抑制における意図-行為-表象の循環的機序に関する実証的研究，2010，122

６．研究組織

(1)研究代表者

野村　幸正（NOMURA Yukimasa）
関西大学・文学部・教授
研究者番号：30113137

(2)研究分担者

金敷　大之（KANASHIKI Hiroyuki）
畿央大学・健康科学部・専任講師（2007～2008 年度），准教授（2009 年度）
研究者番号：30388897

森田　泰介（MORITA Taisuke）
岡山学院大学・人間生活学部・専任講師（2007～2008 年度），東京理科大学・理学部・専任講師（2009 年度）
研究者番号：10425142